

# フランスの「フォルマシオン・ミュージカル」にみられる特質

—導入期における指導要領および教材の分析を中心に—

松 永 朋 美

(本講座大学院博士課程前期在学)

## はじめに

「ソルフェージュ (solfège)」は、フランス語のままに日本に定着した唯一の科目であり、今日、音楽の基礎教育全般を担う必須科目として位置づけられている。「ソルフェージュ」という言葉がフランスで現れ始めたのは1760年頃のこと、当時はイタリアのソルフェッジオ (solfeggio)、すなわち声楽家のための歌唱訓練および練習曲集を意味していた。しかし、まもなくフランスでは「音楽の基礎的学習」としての意味に置き換えられ、19世紀後半にはフランスおよびベルギーを中心として、音楽の基礎科目として確立され完成されている。フランスでは、その後独自の発展を続け、1978年、従来の「ソルフェージュ」から「フォルマシオン・ミュージカル (formation musicale、総合的な音楽形成)」に科目の名称が改められて、その教授法も一新された。そこには、ソルフェージュ教育の徹底を重んじるあまり教育内容を分断化しすぎ、器楽教育との結びつきから遠ざかる結果を招いた反省がこめられていた。「フォルマシオン・ミュージカル」は、従来のソルフェージュ教育を根底から否定し覆すものではなく、ソルフェージュ教育と器楽教育の間に広がった溝を回復することを大きな課題とし、既存の作品<sup>1)</sup>をソルフェージュ課題の中にできる限り取り上げることで、音楽作品の理解と表現をより深め、身につけることを目標として改善された教授法なのである<sup>2)</sup>。

しかし、「フォルマシオン・ミュージカル」にも課題はある。第1に、指導者の問題である。「フォルマシオン・ミュージカル」は教材として既存の作品を扱うため、指導者は非常に高度な音楽性と音楽的教養をもっておかなければならない。また、与える教材としての作品については十分吟味されなければならない、非常に多くの準備時間を要する。第2に、従来の「ソルフェージュ」と比較してその学習速度がゆっくりとしているため、高度な読譜力が低下しているという実態である。そのため音楽家養成の訓練としては十分とはいえ、その教授法が確立されて25年余り経った現在、従来の「ソルフェージュ」にみられるような高度な訓練も取り入れながら、その教授がなされている場合が多いようである。

「フォルマシオン・ミュージカル」は、決して基礎的訓練をなおざりにしてよいといっているわけではない。訓練が分断化され、練習課題の中だけで完結してしまうというこれまでのやり方を反省し、音楽教育の原点を見つめなおした結果生まれたものなのである。音程の学習1つを取ってみても、日本とフランスの相違は明らかである。つまり日本の場合、音程の学習は、まず音程の名称を覚えることから始まるが、フランスでは、書くこと以前に、聴取した音程を自分の声で出したり、実際に音程を声でつくったりすることに重点をおき、音程のニュアンスの違いを聴き分けることから始めるのである<sup>3)</sup>。また、「フォルマシオン・ミュージカル」は、特に初期段階の教育内容に対して細やかに配慮されたプログラムが用意されていることも特筆すべき特徴である。そこで本研究では、「フォルマシオン・ミュージカル」の初期段階における指導要領および教材に焦点をあて、それらにみられる特質等を明らかにすることを目的とする。そして、わが国のソルフェージュ教育の中でも特に導入期における指導に対して、何らかの示唆を得るものになりたい。

## 1. 「フォルマシオン・ミュージカル」とは

フランスの伝統的ソルフェージュ教育は技術面の訓練を重要視してきた傾向にあるが、聴音能力が非常に高く驚くべき速さでクレ読み(7つの音部記号による読譜訓練)ができていたとしても、実際の音楽活

動の中でその能力を生かせないという実情があった。つまり、それがいかに高度な知識や読譜技術であっても、音楽の全体性を見失い1つ1つの訓練が切り離された「部分」の寄せ集めで完結する限り、実際の楽曲全体を把握し理解することや、器楽を用いた実技の表現の中にソルフェージュで養った知識を生かしていく方向には直接結びついていけないということが起こっていたのである。それが、従来のソルフェージュ教育の大きな問題であり、改善されるべき課題であるとされた。「フォルマシオン・ミュージカル」は、その現状を打破するために考案された教育法であり、「リズム練習」「クレ読み」「聴音」「視唱」などの訓練に「音楽史」「様式分析」「鍵盤和声」「伴奏付け」「即興」に至るまでのすべての音楽的要素を加えた総合教育である<sup>4)</sup>。

「フォルマシオン・ミュージカル」という名称は、直訳すると「音楽形成」であるが、その内容をより正確に表すとすれば「音楽総合教育」あるいは「音楽家総合形成」となる。これは1976年、当時の文化省音楽局長であった Landowski, Marcel が改革の礎を築き、 Bleuse, Marc, Gartenlaub, Odette らを中心として、長年音楽教育に携わった人々を含む有識者7～8人で組織されたフォルマシオン・ミュージカル検討委員会が発案され、1978年5月の政令によって改称されたものである。

「フォルマシオン・ミュージカル」では、音楽の基礎能力を伸ばすソルフェージュにおいて、既存の楽曲を使用することにより、より音楽的に質の高い指導を目指している。そのため、与える教材としての作品については十分吟味される必要がある。また、授業内容に関しては指導者の能力やセンスに委ねられているため、指導者には非常に高度な音楽性と音楽的教養が必要であり、そして何より教材用の楽曲選びから指導案の作成まで、非常に多くの準備時間が要求される。この点については今後の課題であるといえるが、パリでは「フォルマシオン・ミュージカル」の教材も次第に充実しつつある<sup>5)</sup>。

## 2. 「フォルマシオン・ミュージカル」の教育課程の全容

「フォルマシオン・ミュージカル」の教育課程は、*Etudes de Formation Musicale* (1977) に明示されている。これは、フォルマシオン・ミュージカル検討委員会によってソルフェージュの教育内容の改革が行われた結果、フランス文化省により発行されたものであり、全66ページから構成されている。現在では通常、パリに存在する文化省の中にある課 (DMDTS = la Direction de la musique, de la danse, du theatre et des spectacles) でのみ閲覧することができる。

次に示す表1～表4は、*Etudes de Formation Musicale* (1977) , pp.4-7 を訳出したものである。

表1 第1課程 : Cycle I

学習段階	年齢	1週間の時間割	定員	選択科目	修学年限	試験・賞
音楽覚醒 クラス	5歳(=幼稚園 年長)	2×45分	8		1年	無試験
入門1	6歳(=小学校 第1学年)	2×45分 +選択科目1時間	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・器楽合奏または合唱</li> <li>・既存の様々な教育メソッドによる身体表現</li> <li>・1時間</li> <li>・各々の生徒は、合唱入門クラスへ最低1時間参加しなければならない</li> </ul>	1～4年 (飛び級、あるいはある段階を留年することが可能)	無試験
入門2		15	無試験			
入門3		15	準備段階への 進級試験 (合格・不合格)			

表2 第2課程 : Cycle II

学習段階	年齢	1週間の時間割	定員	選択科目	修学年限	試験・賞
準備	9～10歳(=小学校第4または第5学年)	2×1時間(楽器による読譜入門を含む) +選択科目1時間	15 15	・器楽合奏 ・合唱	3～5年  (飛び級、あるいはある段階を留年することが可能)	無試験
初級		2×1時間30分 (楽器による読譜を含む) +選択科目1時間	15			
中級		2×1時間30分 (楽器による読譜を含む)				修了段階への進級試験 (合格・不合格)

表3 第3課程 : Cycle III

学習段階	年齢	1週間の時間割	定員	選択科目	修学年限	試験・賞
終了		2×2時間	15	・合唱 ・器楽合奏 ・エクリチュール入門	3年まで可能	フォルマシオン・ミュージカル修了証書 (優・良の成績つき、あるいは評価なし)

表4 第4課程 : Cycle de Specialisation

学習段階	年齢	1週間の時間割	定員	選択科目	修学年限	試験・賞
上級		2×2時間30分	10		3年まで可能	・入学試験 ・第1、第2、または第3メダル取得試験(国立高等音楽院の試験科目免除に相当するレベル)

以上のように、「フォルマシオン・ミュージカル」の教育課程は、専門課程の前までが大きく3段階に分かれており、第1課程から順に修了していく仕組みになっている。この第3課程を修了していることが、少なくとも国立高等音楽院の入学試験の受験資格を得るための条件である<sup>6)</sup>。

### 3. 「フォルマシオン・ミュージカル」第1課程(1年目)の指導要領

フランス文化省は、上記の教育課程にしたがい、これら各課程の詳細にわたる指導要領を明示している。各課程の一般的な修学年数は、飛び級と再履修の場合を除けば、第1課程4年間、第2課程4年間、第3課程3年間、専門課程3年間であり、この指導要領は14年間の学習内容として考案されている<sup>7)</sup>。以下は、「フォルマシオン・ミュージカル」第1課程(1年目)の指導要領 *Etudes de Formation Musicale (1977)* , pp.15-19 を訳出したものである。第1課程の指導要領は、「声とメロディ」「即興」「音符の読譜」「リズム」「聴音」の5領域に分類されており、詳細なプログラムが用意されていることが特徴である。なお、翻訳にあたっては、泉谷の研究<sup>8)</sup>を参考にした。

## (1) 声とメロディ

### I. 歌の練習による声の教育、および音楽作品の主題：

発声の遊び：a) 腹式呼吸

b) 声を出すこと、止めること（身ぶりと結びつけて）

c) 持続音（グループでの斉唱）

d) 声域の開発：（柔軟体操）

（物まね）

（移調）

（用語：低い音、高い音）

（概念：隣り合わせの音、離れた音）

e) 幼児のレロレロ音<sup>9)</sup>と様々な擬音語：発声法、唇の遊び

f) 表現：音色や強弱の変化

### II. 段階的なたくさんの旋律的フレーズによる、反復、記憶、および移調：

— 声あるいは様々な楽器による、決まったフレーズの反復

— 著名な歌による内的聴取の学習

— よく理解された課題の移調

- ・ 提示されたフレーズの表現の多様性、すなわちダイナミック、リズム、旋法や調性に留意すること。
- ・ 音楽的フレーズの中で高揚する感覚や間の感覚を、徐々に作り出すこと。
- ・ 音程の方向感覚を次第に作り出していくように、歌や旋律の実例を選択していくこと。

## (2) 即興

### 可能な限り自由に個々の表現を探し求めること

— 様々な音響物の創造および探究

— 自由な声の表現

— 質問と答えの概要：（完全終止の概念）

簡単な旋律の最後で、終止音の前に立ち止まり、質問をする。

## (3) 音符の読譜

### 下準備：

— 身ぶりと音を結びつける。

— 記譜法の感覚が与える横の移動をともなって、はやし歌を歌う。

— 5線の線と線の間に“キャンデー”を置く。

音の段階的な広がりを示す。いろいろな音部記号へ広げていく：



以下の事柄に注意すること：

— 読譜と“記譜法”の扱いを関連づける。

— 心の中で読む時間を備える。

— グループの中の複数の音の名前を素早く結びつける学習を支援する。

— 音程の視覚的側面で遊ぶ。

— 1音1音だけで認識することは避ける。

— 重ねられて書かれた音を記憶する。

#### (4) リズム

- 1年目の初めから、拍とリズムを区別することが重要である。十分に自立した筋肉を作り出すためには、拍とリズムをより正確に表現するために取り入れた身ぶりを、少なくとも初めの2課程の間は続けなければならない。
- 唇の上で声に出してリズムを表現することは、筋肉の一部分を使う利点があり、その筋肉はリズム読み、歌、および内的聴取の感覚においても同等の効果がある。
- 終わりのない短い発音あるいは擬声音は、非常に短いフレーズと同様に、もっとも多様なダイナミックを示すことが可能である。とりわけ跳躍（満ち潮）に先行する強調と、降下（引き潮）の後にくる強調を表現する場合、言い換えれば、“弱拍・強拍”の解釈をともなった表現をする場合はいつもそうである。
- 子どもの“自然なテンポ（心拍数）”（約110／1分間）の理解を踏まえておくことは、リズムカルな表現の条件となる（大人の心拍数は、約75／1分間）。平均速度以下になると、リズムは活力が失われ、その結果ダイナミズムが失われる。記譜や読譜は、感覚器の開発の後から介入してくる事柄である。簡単なリズムパターンは、聴音や読譜においては単独で理解されるべきである。
- 楽器の響きによる音価
  - 休符の概念
  - 強拍、支えの発見
  - アウフタクト
  - 強拍の周期性（小節線を予測する）
- 3拍子の感覚へのアプローチ
- 同時に、どんなリズムの長さも感覚の遊びにおいて活用することが可能であり、それは不規則な強拍（変拍子）についても同様である。

#### (5) 聴音

- ・ 長期にわたる学習の中では、注意力の心理的な状況を特に重視すること。
- ・ 聴き取りの遊びの様々な展開の仕方を通して、こうした注意力を促し維持していくよう配慮しなければならない。
  - 音の動きの指導（身ぶりと結びつけて、著名な歌を参照して）
  - 音の長さ（身ぶりと結びつけて）
  - 音の強さと、強さの変化（身ぶりと結びつけて）
  - 話し言葉・歌・楽器・様々な音響物の音色の識別
  - 口頭による聴音（ソルフェージュの授業で学んだ歌に関連づけて）
  - 口頭によるリズム聴音：簡単に完結したリズムパターンを用いて。  
リズム聴音は、いろいろな響きの楽器や声、そしてもしできればいくつもの音、あるいは音色によって与えられる。
  - 記憶と内的聴取の学習（内的聴取の学習を容易にするために、学習の諸段階において、音の名前を用いて即興することも可能である）。
  - 微妙な音程に対するの敏感さを養う。

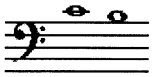



### 4. 「フォルマシオン・ミュージカル」の教材分析

本研究では、「フォルマシオン・ミュージカル」にみられる特質を探るため、上述の指導要領の内容に沿って出版されている教材 *Solfier pour mieux jouer* (Baraud, Sylvie 著、Gérard Billaudot 出版、全4巻) を選定し、学習内容および使用されている教材の点から分析を行った。1冊のテキストはそれぞれ20前後のレッスンで構成されており、各々のレッスンは通常10～20程度の練習課題で構成されている。その学習方法は、理論、エクリチュール、イントネーション、読み（音符やリズム）、聴音（リズムやメロディ）、分析、視唱などである。

本教材は、1999年から2004年にかけて出版された比較的新しい教材である。また、カリキュラムの第1課程4年間のみを対象としたテキストとなっているため、子どもの視点を意識した遊びの工夫が多くみ

られ、ソルフェージュ教育の導入には適した教材だといえる。第1巻は生徒用テキストと教師用テキストの2冊に分かれており、第2巻からは生徒用テキストに教師用の冊子が付属している。なお、ここでは第1課程1年目にあたる、第1巻のみに焦点をあてる。

表5 *Solfier pour mieux jouer* (第1巻) の学習内容と楽曲

レッスン	学習内容			使用されている楽曲
	音符 Notes	リズム Rythmes	理論 Théorie	
1			<ul style="list-style-type: none"> <li>五線譜</li> <li>高い音、真ん中の音、低い音</li> <li>ト音記号</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>歌：「つばめと太陽」(著者)</li> </ul>
2		<ul style="list-style-type: none"> <li>4分音符</li> <li>4分休符</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リピート記号</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視唱：「猫のラップ」(著者)</li> </ul>
3		<ul style="list-style-type: none"> <li>2分音符</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li><i>f</i>と<i>p</i>の違い</li> <li>ハ長調のアルペジオ (C, E, G)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視唱：「1, 2, 3, 木製パイプ」(著者)</li> </ul>
4		<ul style="list-style-type: none"> <li>付点2分音符</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>へ音記号</li> <li>拍子：2/4, 3/4, 4/4</li> <li>クレッシェンドとデクレッシェンドの違い</li> <li>完全和音</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視唱：「ブランコ」(著者)</li> </ul>
5		<ul style="list-style-type: none"> <li>8分音符</li> <li>2分休符</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>穴埋め聴音：「Piquenidouille」(著者)</li> <li>遊び：「月の光に」(フランス民謡)</li> </ul>
6		<ul style="list-style-type: none"> <li>4つ連なった8分音符+4分音符 (タタタタン)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>拍子：2/4, 3/4, 4/4</li> <li>Da Capo → fine</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リズム聴音：「美味い煙草を持っている」(フランス民謡)</li> <li>穴埋め聴音：「ド、レ、ミ、ヤマウズラ」(フランス民謡)</li> <li>視唱：「Branle de Champagne」(作者不明)</li> </ul>
7		<ul style="list-style-type: none"> <li>6つ連なった8分音符+4分音符 (タタタタタタン)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5度の音程</li> <li><i>mf</i></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リズム聴音：「おもちゃのシンフォニー」(L. Mozart)</li> <li>穴埋め聴音：「中国のメロディ」(著者)</li> <li>視唱：「Ah! Vous dirai-je Maman…」(18世紀 作者不明)</li> </ul>
8			<ul style="list-style-type: none"> <li>音階</li> <li>全音、半音</li> <li>隣り合わせの音</li> <li>離れた音</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>視唱：「鉄道」(著者)</li> </ul>
9		<ul style="list-style-type: none"> <li>全音符</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3度の音程</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>遊び：「Dodo, l'enfant Do」(フランス民謡)</li> <li>視唱：「クレオルのクリスマス」(著者)</li> </ul>

10		<ul style="list-style-type: none"> <li>・16分音符</li> <li>・全休符</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シャープ#</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋め聴音:「レントラー」(J. Haydn)</li> <li>・視唱:「Le Cha-cha du Roi」(著者)</li> </ul>
11			<ul style="list-style-type: none"> <li>・フレーズ記号:スタッカート、スラー、アクセント</li> <li>・楽器のグループ:弦楽器、木管楽器</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聴取の遊び:「動物の謝肉祭」(C. Saint-Saens)</li> </ul>
12	おさらい			<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋め聴音:「小さな歌」(R. Schumann)</li> <li>・視唱:「うさぎとかめ」(著者)</li> </ul>
13	まとめ			<ul style="list-style-type: none"> <li>・間違い探し:「Fais dodo…」(フランス民謡)</li> <li>・初見視唱:「キリストこそはわが命」(J.S.Bach)</li> </ul>
14		<ul style="list-style-type: none"> <li>・混合したリズム: 16分音符、8分音符、4分音符</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4度の音程</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋めメロディ聴音: 「Meunier, tu dors」(フランス民謡)</li> <li>・穴埋め聴音:「キリン」(E. Berel)</li> <li>・視唱:「ガレットの踊り」(著者)</li> </ul>
15		<ul style="list-style-type: none"> <li>・付点8分音符+ 16分音符 (タッカ)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オクターブ</li> <li>・フラットb</li> <li>・フェルマータ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋め聴音:「羊飼いの」(著者)</li> <li>・視唱:「B B ブルース」(著者)</li> </ul>
16			<ul style="list-style-type: none"> <li>・オペラ</li> <li>・質問と答え</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋め聴音:「私のためのジャヴア」(著者)</li> <li>・視唱:「フィガロの結婚 第1幕、フィガロのアリア」(W. A. Mozart)</li> </ul>
17		<ul style="list-style-type: none"> <li>・3連符</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・視唱:「店の中のアルルカン」(フランス民謡)</li> </ul>
18	おさらい			<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋め聴音:「飛ぶ蝶々」(著者)</li> <li>・視唱:「古い歌」(ケルト民謡)</li> </ul>
19			<ul style="list-style-type: none"> <li>・2度の音程</li> <li>・交響楽団</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穴埋め聴音:「メヌエット」(著者)</li> <li>・聴取の遊び:「タンホイザー 第1幕 “巡礼の合唱” より」(R. Wagner)</li> </ul>
20			<ul style="list-style-type: none"> <li>・短調の感覚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・聴取の遊び:「ワルツイ短調 op.34 no.2」(F. Chopin)</li> <li>・穴埋め聴音:「ペトルーシュカ」(ロシア民謡)</li> <li>・視唱:「Ani couni」(子守歌)</li> </ul>
21	まとめ			<ul style="list-style-type: none"> <li>・初見視唱:「バラード」(著者) 「小さいプギー」(著者)</li> <li>・穴埋め聴音:「Se canto」 (ピレネー山脈の住民の歌)</li> <li>・間違い探し:「澄んだ泉」(フランス民謡)</li> <li>・分析の遊び:「タンプリン」(J. P. Rameau)</li> <li>・遊び:「ムール貝取り」(フランス民謡)</li> <li>・聴取の遊び: N. Ravel 編曲「展覧会の絵」(M. Moussorgsky)</li> </ul>

## 5. 「フォルマシオン・ミュージカル」にみられる特質

以上のことから、「フォルマシオン・ミュージカル」の指導要領および教材にみられる特質は、次の4点に集約することができた。以下に、譜例を交えて述べる。

### (1) 「音楽への目覚め」という視点

音楽教育の導入期の重要性は、子どもに音楽的に目覚める機会を与えること、そして音に聴き入る姿勢を育て、音に対する注意力や、感じ考えることを習慣化させることにある<sup>10)</sup>。

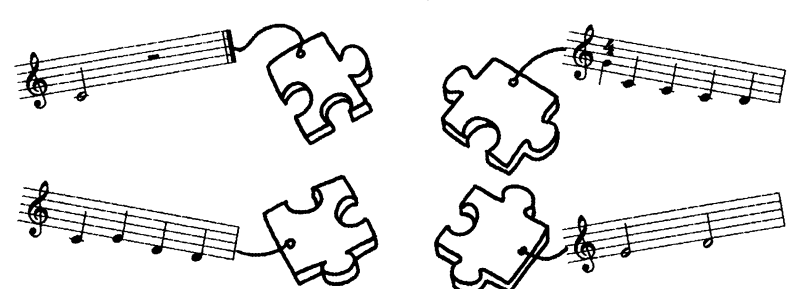
「フォルマシオン・ミュージカル」は、初期段階の教育内容に対して細やかに配慮された指導要領が準備されていることから見てもとれるように、「音楽への目覚め（音楽との最初の出会い）」という視点を非常に大切にしている。教材においては、遊びの要素が多く取り入れられている。

### 譜例1 音楽のパズル（レッスン5より）

**PUZZLE MUSICAL**

Son titre :

● Remets les mesures de cette chanson dans l'ordre :



※1度歌った後、歌の順番になるよう小節を並び替える。  
また、その曲名を答える。

### (2) あらゆる様式の既存の楽曲を使用

既存の楽曲を用いることは「フォルマシオン・ミュージカル」の基本理念であり、それは教材の中にも特質として十二分に表れている。*Solfier pour mieux jouer* 第1巻では、44曲（うち、著者が作曲した楽曲は18曲）の既存の楽曲が用いられている。楽曲の様式は、歌曲、オペラ、ピアノ独奏曲、交響曲、協奏曲など多岐にわたっており、はやし歌や民謡も多く含まれている。また、作曲家やその時代も様々である。学習者は、視唱はもちろん、分析、聴音、理論、音楽遊びなど、様々な課題の中で既存の楽曲に触れることにより、広い範囲で多くの曲を知ることができる。さらに、訓練で培った能力を既存の楽曲の中で応用することによって、技術的訓練がただの訓練に終始することなく、その能力の発揮すべきところが楽曲そのものであるということを理解し、きちんとした方向性をもって取り組むことができるようになるというだろう。

### (3) 「歌う」ということの重視

古曾志（1989）は、ガルテンロープ女史の授業で最も多く行われたのは、歌うことであった、と述べている。それは既存の作品の視唱のみならず、聴音問題の記憶、書き取った後の音の確認、コーラルやフーガの合唱、伴奏付けのメロディ視唱と、多方面にわたって必ず歌われたようである。反対に、視唱課題の



中でも、それに関連して様々な訓練ができるよう工夫されている。そして、その視唱の課題として取り上げられているものの大半は、(2)で挙げた既存の楽曲であるというところも、特筆すべき点である。また、指導要領においても、発声、歌、声などといった記述は多く見られる。

歌うことは、音を再現するために誰もが出来る最も容易な方法である。声を出すことによって、受け身になりがちな学習者の態度が生き生きと積極的になることも期待できる。

## 譜例2 視唱（レッスン9より）

### LECTURE CHANTÉE

*Noël créole*

*Avec la douceur des îles...*



S. B.



- Compte les arpegges : ....
- Entoure : - les 3<sup>me</sup> en rouge  
- une gamme en bleu



※ アルペジオの数を数える。  
3度の音程を赤丸で、音階を青丸で囲む。

#### (4) 分析的聴取

「フォルマシオン・ミュージカル」の大きな特徴である分析的聴取は、できる限り早い時期から実施されるべきものである<sup>11)</sup>。初歩では簡単なピアノ曲などから始めるが、徐々に他の編成の課題に移っていく。様式や時代に偏ることなく、多くの楽曲を聴いて分析的な耳を育て、音楽史や和声、楽器に関することやオーケストレーションに至るまでの内容を豊富に盛り込み学習することで、音楽文化の総合的な知識を身につけていくことができる。

## 6. 総括

「フォルマシオン・ミュージカル」の初期段階における指導要領は、長期にわたる学習期間を視野に入れて、子どもが楽しく学習を継続できるよう工夫されたプログラムが用意されていることが明らかとなった。また、その指導要領の内容に沿って出版されている教材では、遊びの要素が多く取り入れられ、簡単な既存の楽曲を用いながら子どもが無理なくソルフェージュ能力を身に付けられるような内容になっていることが分かった。このように、フランスの「フォルマシオン・ミュージカル」では、導入期から総合的に音楽的な能力を身につけることができるようになっている。

### おわりに

ソルフェージュ教育の重要性は、「音楽という外国語を学ぶこと」と言い換えてもよいであろう。つまり、ソルフェージュ教育とは、音楽の「読み書き」ができる能力を養うことなのである。しかし、日本の音楽教育では演奏技術を習得することとばかり重点がおかれがちであり、音楽を専門に学ぶ者だけが、大学入試のために視唱や聴音を学ぶというような図式ができあがっているように思われる。フランスの早期音楽教育の体制では、画一的ではなく、個々の能力に合わせて学んでいくことが可能である。早期音楽教育の中で、楽器がうまく弾けなくても、音楽的な素養と音楽を聴く耳は、確実に育っている<sup>12)</sup>。これは、楽器を演奏するだけの日本の音楽教育の現状からは出てこない側面であり、西洋の文化の厚みともいえる。長年の歴史をもつフランスのソルフェージュ教育が、音楽の総合性に立ち戻るべく、その歴史の定型から抜け出し教授法と教材の見直しを進め実践に移したことは、現代の音楽教育にとって無視できない警告として受け止める必要があるのではないだろうか。

本研究では、フランスの「フォルマシオン・ミュージカル」の指導要領および教材を中心に分析・考察を進めた。「フォルマシオン・ミュージカル」は理想的な教育法である。しかしその反面、教師の力量や日常の研鑽など、「フォルマシオン・ミュージカル」に対する深い理解が必要な点では、非常に困難な教育方法であると感じた。今後、わが国の音楽教育へ「フォルマシオン・ミュージカル」を導入していくためには、その制度やカリキュラム、教材に関する研究をさらに進める必要がある。また、それらの教材を用いて、学習者に対してどのような指導を行えばよいのかということについては、これからの課題として取り組んでいきたい。

### 【註および引用・参考文献】

- 1) しばしば「実作品」という言葉が用いられる。
- 2) 泉谷千晶「フランスの「フォルマシオン・ミュージカル」の変遷と改革—1978年以降のソルフェージュ教育の動向—」『青森明の星短期大学紀要』第25巻、1999、p.8
- 3) 泉谷千晶「保育者養成課程の「音楽」の視点と総合的な授業展開の試み—フォルマシオン・ミュージカルの応用の可能性—」『青森明の星短期大学紀要』第26巻、2000、p.10
- 4) 古曾志洋子「フランスにおけるソルフェージュ教育の現状〈ポワティエ夏期音楽大学に参加して〉」『洗足論叢』第18号、1989、p.174
- 5) 内藤忠勝「ソルフェージュからフォルマシオン・ミュージカルへ—その光と陰—」『武蔵野音楽大学研究紀要』第37巻、2005、p.57
- 6) 前掲書2)、p.9
- 7) 前掲書2)、p.10
- 8) 前掲書2)、pp.10-13
- 9) “lallation” = L音とR音を区別できない前言語状態の1つで、喃語のようなもの。
- 10) 泉谷千晶「フランスの音楽教育とソルフェージュに関する一考察—日本の音楽教育が抱える問題点について—」『青森明の星短期大学紀要』第24巻、1998、p.14
- 11) 前掲書4)、p.178
- 12) 前掲書10)、p.20